

## 1. 国際金融の専門家として私の歩んだ道

1979年に大学を卒業し、東京電力に入社、11年間在籍した。営業現場で企業実務を学び、その後は燃料調査、購買業務に従事しながら英語を使い世界の燃料ビジネスに触れたことが、国際協力・開発金融の仕事に関心を持つきっかけとなった。

1991年に辞職し国連工業開発機関 (UNIDO) に入り、ウィーンで国連の途上国開発支援に携わった。旧ソ連崩壊という情勢に対応して1991年に欧州諸国の主導で米国、日本他の国々も加わって設立された欧州復興開発銀行 (EBRD) に1993年に移籍した。EBRDは旧ソ連圏諸国の民間産業の育成と市場経済への移行を促すことを目的としていた。本部では電力チームのバンカーとしてアゼルバイジャンとジョージアの電力事業復興のための仕事に従事した。

EBRDは1990年代の主な活動として中・東欧諸国のEU加盟に向けての経済復興を支援した。並行してコーカサス、中央アジア諸国の経済復興支援も行っていった。1999年にEBRDタシケント事務所長の職についた。以後12年間にわたりビジネス環境の厳しいバルカン半島、中央アジア地域の国々で民間産業の育成のための金融・中小企業支援業務に従事した。2011年から2015年に退職するまでロンドンの本部銀行局で中小企業支援チームのシニアマネジャーを務めた。開発支援機関としてEBRDに対する期待の強さを感じることができて、現場での仕事にやりがいを感じた。

2015年にEBRDを辞して帰国し、産業技術大学院大学経営倫理研究所付置のユーラシア産業技術研究所 (EIIT) 所長、国際開発研究者協会 (SRID) キャリア開発事業担当幹事などを務めている。

## 2. 欧州復興開発銀行 (EBRD) とは？ 役割と実績

第二次大戦末期の1944年に戦争を繰り返さないために、戦勝国側により米国ブレトンウッズで戦後の経済安定策が議論された。この時の協定に沿って、国際通貨基金 (IMF) と国際復興開発銀行 (IBRD：世銀グループの主力機関) が1945年に設立された。その後旧宗主国からの旧植民地諸国の独立を経て、途上国開発支援のニーズが増大し、米州開発銀行(1959年)、アフリカ開発銀行 (1964年)、アジア開発銀行(1966)の設立につながった。当初は独立的な性格も持っていたこれらの新興の地域国際機関も現在では国連システムと呼ばれる大きな枠組みの中の一部として活動している。

EBRD は冷戦終結直後の 1991 年にこのような地域開発金融機関の一つとして発足した。

1991 年の旧ソ連の消滅によって、中央による統制下にあった旧ソ連圏の諸国（1991 年に独立国家共同体 CIS に参加した諸国とその他の国々）は政治のみならず経済面でも大混乱となった。EBRD は荒廃した旧ソ連圏諸国の民間産業を育成し、市場経済への移行を支援することに努めた。IMF、世銀グループなど従来の国際金融機関の活動が当該国政府を経由するため、重大な影響力を持ちながらも、制約が多いのに比し、EBRD の場合は公的セクターの支援にとどまらず、機動的に民間セクターを直接支援できる点が特徴である。

2007 年までに中・東欧 10 か国が、EU 加盟を果たし、その後の拡大の動きはほぼ止まったままとなった。この時点までに EBRD が EU 拡大に貢献した役割は大きい。EU 拡大が一段落するのに並行して、EU に隣接した地域以外での活動の活発化が EBRD に求められるようになり、新たにモンゴル、トルコが活動対象国となった。同時にバルカン半島、コーカサス、中央アジアにおける活動を増加させるべく様々な努力が積み重ねられた。さらに 2008 年の国際金融危機、2011 年の「アラブの春」を経て EBRD の活動は活発化した。北アフリカ、地中海地域にも事務所が開設され、活動対象国は 37 か国となった。現在の事業規模は年間約 400 件、95 億ユーロである。資本金は 300 億ユーロで、EU がグループとしては最大の出資国 (59%) であり、日米も有力加盟国である。

### 3. EBRD の事務所長として経験した各国の状況

旧ソ連圏の周辺諸国はモスクワの強い統制下にあり、産業面でも中央の統制による国別分業体制が徹底していた。このため 1991 年に独立を達成した後も、各国の経済運営は極めて困難な状態にあった。市場経済への移行支援策として EBRD は地域産業の育成を支援したが、これら諸国が抱える課題は多岐にわたっていた。私が EBRD 事務所長として駐在した国々で印象の強いものをいくつか写真を交えて紹介する。

#### 3-1. ウズベキスタン

ウズベキスタンは紀元前はアレキサンダー大王の東征の土地でもあり、14 世紀にはチムール帝国として栄えた時代があり、20 世紀に入ってから旧ソ連 4 番目の都市タシケントを首都とするなど長い歴史と伝統のある国である。金、石油、ガス、綿花など資源に恵まれ、世界遺産も多い。

独立後 4 半世紀にわたって続いたカリモフ大統領の下での閉鎖的な経済政策もあり経済は停滞傾向にあった。2016 年にカリモフ大統領が亡くなると、新しい政権の

下で次々と開放的な経済政策が打ち出され、今後の発展が期待されている。東には緑豊かなフェルガナ盆地、国土の中央を二つの大河が流れるなど恵まれた風土であり、豊富な歴史遺産が魅力的な土地である。日本からの旅行者も急増している。国民はきわめて親日的。日本語学習も盛んで、名所には観光客のための「KOBAN」があるなど観光業の開発に力を入れている。

### 3-2. キルギス共和国

中国と天山山脈を挟んで接する山と湖の国である。日本のほぼ半分ほどの国土に 610 万人が住んでいる。わたしにとっては 1990 年代にロンドン本部から何度も出張して電力プロジェクトを担当し、中央アジアとの出会いとなった国である。カザフスタンとの国境に近いタラス地方の送電線網整備を担当したことが印象深い。タラスは 751 年に唐とイスラム帝国アッバース朝 (サラセン帝国) が激突した古戦場でもある。現地部の部族がイスラム軍側についたため 3 万の唐軍は大敗し、中央アジアはイスラム勢力圏となった。わたしが事務所長として駐在していた時に 2010 年 4 月 7 日の政変に遭遇したのは忘れられない記憶である。ビシュケクの大統領官邸前で大規模な騒乱となった。自宅で不安な夜を過ごし、翌日からキルギスの友人の家に避難させてもらった。この伏線となったのは 2008 年の金融危機の影響でロシアやカザフスタンに出稼ぎに行った働き手からの送金が減少したことである。厳寒の長い冬を経て、春先は人々の生活が厳しくなる。2010 年初めに電気、ガス、電話など公共料金の値上げが発表されると人々の不満は高まった。国有企業の私物化などが国際ニュースで流れると政権への不信感が高まり、人々の怒りと不満が爆発した。近年は、中国による大規模な鉄道建設や道路建設のほか、経済進出が目立つ。2017 年に訪れた時のビシュケクの様子は賑やかで、街角やバザールの人々にも活気があった。この国のこれからの発展が注目される。

### 3-3 タジキスタン

タジキスタンは世界の屋根パミール高原の西側に位置する山国であり、険しい山々によってフジャンドを中心とする北部とドシャンベを中心とする南部に分かれている。国民の大多数はイラン系の言語を話す。旧ソ連時代は豊富な水力を活用した電力を使って大規模なアルミニウム生産を行っていたが、旧ソ連崩壊後は資金不足でダム建設ができなくなり、水力発電とそれに依存していたアルミニウム製造業も停滞した。独立を達成した翌年から 6 年にわたり内戦が起これ、その後は国連のタジキスタン監視団が平和維持に努力した。この活動に加わっていた日本人職員 (故筑波大学秋野豊教授) が殉職されるなど難しい状況を経験してきた。

2019年にこの国を再訪する機会があった。緑豊かな街角を歩くと伝統的な民族衣装を着けた女性が目立つ。バザールでの商業活動はこの国の経済の中心であるが、ここでも女性の活躍が目立つ。これは働き手である壮年男性の多くがロシア、カザフスタンなどの建設業に出稼ぎに行っているからである。出稼ぎに出た移民労働者からの送金は国内総生産の4割程度を占めている。この国では基幹インフラ整備、旧国営の大規模産業(アルミニウム)のガバナンスの向上、生産性の改善などの課題に加えて、農産物加工業(乳製品、ジュース、果実加工品など)、IT産業など地場の中小企業を育成することが最重要の課題となっている。

#### 4. 結び 国際機関について

以上ご紹介したように EBRD は必ずしも設立時の定款に縛られることなく、時代とともに変化する活動対象国のニーズに応えるために変遷を重ねてきた。近年では機動的なビジネス活動が評価されて、一時あった他機関(欧州投資銀行)との合併論も聴かれなくなった。国際機関をめぐる議論が時代と共に変動する点も注目に値する。

最近の状況として、活発化する中国から途上国への開発投資があり、その機関として設立されたアジアインフラ開発銀行(AIIB)にも欧州諸国が参加している。EBRDも協調融資を実施するなど連携の姿勢を見せている。欧州における移民問題、英国のEU離脱の行方なども今後のEBRDの動きに影響する要因である。

わが国にとっても国際機関の動静は対岸の火事ではありえない。グローバルな政治経済の動きが相互に影響し合う時代である。ましてや国際機関の活動は加盟国の税金で賄われているのであり、わが国の納税者としてもきちんと説明を求めていくことが大切である。

今日の日本の若い人々の間で国際的な仕事について二極に分化した態度が見受けられる。一方で、日本にいたままでも世界のニュースが見られ、仕事でもITでつながる時代だからわざわざ世界に飛び出して苦勞する必要はないという若者たちがいる。他方で、英語で仕事をすること、ITスキルを駆使することへの抵抗感がなくなって、国際機関への就職を希望する人たちも増えている。

以上私の個人的な見聞を基にしてお話させていただいた。ユーラシア大陸各地の多様な現状と国際機関を通じての多岐にわたる活動の実態をその一部でも感じていただき、今後の世界の動きを見る上で参考にさせていただければと願っている。ご清聴ありがとうございました。

(了)